

## 第4章 現代に生きる人間の倫理 — 西洋近代思想 —

### 1. 人間の尊厳

#### 1. ルネサンスと宗教改革

##### <ルネサンス Renaissance>

中世ヨーロッパ……キリスト教支配、神中心の世界観、「人間は罪深い存在」

⇔近代（近世）……ルネサンス＝古代ギリシアの人間中心文化の“復興”

\_\_\_\_\_（人文主義）＝人間性を肯定的に考える

◎ \_\_\_\_\_（1463-94、フィレンツェの人）

『人間の尊厳について』（これを発表しようとして教会から破門された。）

- ▶ 人間は他の被造物と違い、\_\_\_\_\_によって自分の行動を選べる。そこに**人間の尊厳**がある。

◎ \_\_\_\_\_（1452-1519）……『モナ・リザ』『最後の晩餐』

当時の人間の理想像＝\_\_\_\_\_（普遍人、Homo universalis）の代表的人物

※“万能人”の先駆……**アルベルティ**（1404-72）

「人間は欲しさえすれば何事でも成し遂げることが出来る」

＝神から与えられた様々な能力を十分発揮することが、神の意志に応えることである。

◎ \_\_\_\_\_（1469-1527）

『\_\_\_\_\_』……政治と道徳を区別。人間の行動を現実的にとらえる。

- ▶ 理想は「**ライオンの勇気とキツネの狡知**」を兼備し使い分けること。
- ▶ **運命**は人間の活動の半分を支配するものであるが、  
残りの半分は人間の**自由意志**の活動にまかされている。
- ▶ 運命の神は女神であるから、冷静な人よりも冒険的な若者に屈する。

※彼自身は共和主義者。「ローマ論」も著す。

◎ \_\_\_\_\_（オランダ、1466-1536、アルプス以北最大のヒューマニスト）

『\_\_\_\_\_』（1511）……君主・貴族・聖職者の生活を風刺

- ▶ カトリックを批判したが、ルターのように離れはしなかった。  
→ 1524「自由意志論」を発表

⇔ 1525 ルター「奴隸意志論」……自由意志否定＝善行の否定

これは人間性を肯定するルネサンス・ヒューマニズムとは相反する

◎ \_\_\_\_\_（英、1478-1535）

『\_\_\_\_\_』（1516）……“**困い込み**”などを取り上げ現実を風刺

私有財産のない理想社会。しかし現代の目で読むと集団管理社会。

##### <宗教改革 Reformation>

先駆者として、**ウィクリフ**（英、1320-84）、**フス**（ベーメン、1370-1415）

同時代では、**サヴォナローラ**（1452-98、ルネサンス期のフィレンツェで神権政治）

\_\_\_\_\_（ドイツ農民戦争指導者）

\_\_\_\_\_（チューリヒで活動）→ 2人とも“再洗礼派”

◎ \_\_\_\_\_（1483-1546、ドイツ人）

1517.10.31 『\_\_\_\_\_』発表……贖宥状販売を批判

1519 ライプツィヒ討論……教皇派神学者エックとの論争。教皇権威を否定。

1520 主著『\_\_\_\_\_』を著す

1521 教会から破門 1521-22 **聖書のドイツ語訳**

「人は（善行によってではなく）信仰によって義とされる」（パウロ→p.40）

→ 善行＝教会への寄付などのこと

・贖罪（罪のゆるし）は信仰によってのみ可能（＝\_\_\_\_\_説）

・信仰のよりどころは聖書のみ（聖書中心主義）

・信仰する者はだれでも祭司である（\_\_\_\_\_主義）

カトリック教会の聖職者が「貴族」身分とされていることを批判

1524-25 ドイツ農民戦争……ルターは諸侯らにこの鎮圧を勧告

ルターは、世俗の権力は神の創造によるものとして尊重し、

純粋に信仰の世界の改革のみを考えていた。

※**ルターの限界＝20世紀まで続くドイツ人の世界観**

内面的世界を重視し、外面的なもの（政治・経済など）を軽視

◎ \_\_\_\_\_（1509-64、フランス人、ジュネーヴで活動）

著書「キリスト教綱要」

教義としては、ルターの聖書中心主義などを受け継ぐ

\_\_\_\_\_説……救済されるか否かは神の意志として既に決定されている

\_\_\_\_\_観（英 calling、独 Beruf、天職）……ルター派にも見られる

「神の栄光」を実現するために**禁欲的に**天職に専念した

結果としての「富の蓄積」は救済の確信につながる、として肯定

※マックス・ヴェーバー（1864-1920）「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

上記の職業召命観を、近代資本主義経済が発生する条件の1つと考える

## 2. 人間性の探究

< \_\_\_\_\_ moralistes (仏) >

16 ～ 18 世紀に随筆形式の手記を残し、人間の生き方を探求した思想家

◎ \_\_\_\_\_ (仏、1533-92、) ……著書『 \_\_\_\_\_ (随想録)』

“ \_\_\_\_\_ ” (Que sais-je ? = 私は何を知っているのか?)

= \_\_\_\_\_ 主義 ……しかし「何も知ることはできない」という意味ではなく、  
自分自身の考え方や態度を謙虚に問い直すことを説いたもの  
→「寛容」を説く ……これを備えた理想人が「ジャンティ・オム (gentil homme)」

◎ \_\_\_\_\_ (仏、1623-62) ……遺稿『 \_\_\_\_\_ 』 (Pensées ← penser 考える)

- ・“人間は**考える葦**である”
- ・人間は、偉大さと悲惨さの間を揺れ動く**不安定な中間者**  
この悲惨さを直視すべきなのに、多くの人は「**気晴らし**」に逃げている。
- ・真理を認識するには \_\_\_\_\_ (=合理的・科学的精神) だけでは不十分  
\_\_\_\_\_ ……“繊細” だからこそ、ものごとの真理を“直観” できる。  
→人間に神の愛を自覚させ、神とともに生きる喜びをもたらす

## 2. 近代の科学革命と自然観

### 1. 科学革命

……ガリレイからニュートンにいたる近代科学の成立過程をあらわす。

◎ \_\_\_\_\_ (ポーランド、1473-1543)  
地球は太陽の周りを公転している ( \_\_\_\_\_ )、と説く。

◎ \_\_\_\_\_ (イタリア、1564-1642)  
同じく地動説を説き、宗教裁判にかけられる。  
その他、振り子の等時性の法則、物体落下の法則、など

◎ \_\_\_\_\_ (ドイツ、1571-1630)  
惑星の運動に関する法則 (楕円軌道で公転する、など)

◎ \_\_\_\_\_ (イギリス、1643-1727)  
…… \_\_\_\_\_ の法則、など。著書『 \_\_\_\_\_ 』

※教科書に書いてあるように、彼らは「キリスト教の信仰ゆえに、この業績をあげた。」  
つまり、「自然は、数学的に美しい法則に従っているはずだ。  
なぜなら自然は、神がお作りになったものだから。」と考えたのである。

⇕

※しかし、彼らの科学的業績は、結果的には、キリスト教による迷信をうち砕いた。

## 2. 経験論と合理論

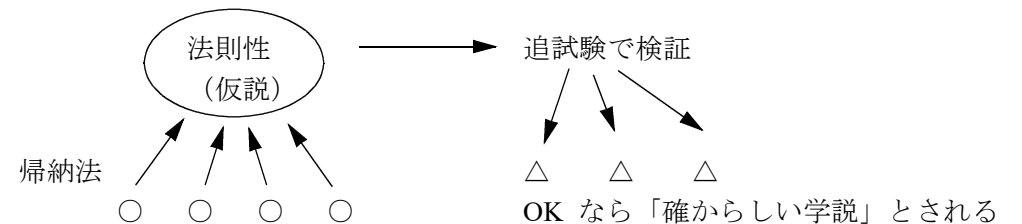
< イギリス経験論哲学 >

◎ \_\_\_\_\_ (1564-1626) ……著書『 \_\_\_\_\_ (新機関)』 (1620)  
“ \_\_\_\_\_ ” = 自然を理解することでこれを支配する

- ◆ 4 つの \_\_\_\_\_ (幻影、偏見などの意味)  
事物を観察する際に排除すべき先入観のこと。
1. \_\_\_\_\_ のイドラ ……人間中心に考えたり、物事を不変と思いこんだりする
  2. \_\_\_\_\_ のイドラ ……個人が自己中心的に考える
  3. \_\_\_\_\_ のイドラ ……言葉の不適切な使用 (うわさ、早とちり)
  4. \_\_\_\_\_ のイドラ ……伝統的権威などをうのみにする

自然に服従する (ありのままに理解する) ことによって自然を支配する

◆ \_\_\_\_\_ ……経験から一般法則を導き出す



◎ **ホブズ** (1588-1679)  
実在するのは物体とその運動のみ。普遍的実在などというものは無い = **唯名論**  
自然現象だけでなく心的現象も物体の機械的運動による。 = **機械論的自然観**  
外的物体が感覚 → 記憶となり、知識の源泉となる。

◎ \_\_\_\_\_ (1632-1704)  
人間の生得観念を否定。生まれたときの心は「**白紙** ( \_\_\_\_\_ )」  
白紙の人間が観念を持つのは、全て「**経験から**」である。

◎ \_\_\_\_\_ (1711-76) ……**懐疑論 (不可知論)**  
・経験論を徹底 → 事物間の因果関係は必然ではない。  
「**観念は印象の束**」 ……法則そのものは経験できない。単なる連想の産物に過ぎない。  
・人格の同一性 (実体) は存在しない = 「自我は**知覚の束**にすぎない」

◎ \_\_\_\_\_ (1685-1753)  
「存在することは、(誰かによって) 知覚されることである。」  
Esse est percipi (エッセ・エスト・ペルキピ)

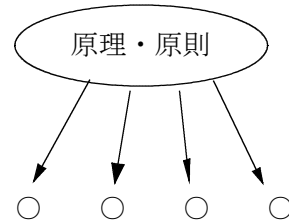
## <大陸合理論哲学>

◎ \_\_\_\_\_（仏、1596-1650）……著書『\_\_\_\_\_』（1636）

◆ \_\_\_\_\_……疑いうる全てのことを疑うことから始める

→第1原理「Cogito, ergo sum（\_\_\_\_\_）」に到達  
コギト・エルゴ・スム（仏語 Je pense, donc je suis.）

◆ \_\_\_\_\_……原則をもとに数学的な証明の手続きで個々の事象を論証する



・良識（bon sens、\_\_\_\_\_）……誰でも持っている（**生得観念**）  
善悪の価値観など（理性） ↔ タブラ・ラサ

・近代的自我……**高邁の精神**をもって欲望を制御し主体的に考える人間

・**物心二元論**……「人間の精神」と「外界・自然（＝**延長・広がり**）」とを区別

・**機械論的自然観**……人間は自然界の物体をさまざまな部品に分解し  
それらを人間の生活に役立つように再び組み立てることができる

◎ \_\_\_\_\_（蘭、1632-77、ユダヤ人だがユダヤ教会から破門）……著書「エチカ（＝倫理）」

◆ \_\_\_\_\_**論**……唯一無限なる存在＝神＝自然そのもの（神即自然）と考える。  
それゆえ全ては神の決定によるので、人間の意志の自由は存在しない。  
我々が自由だと考えているのは、無知だからにすぎない。

→ **永遠の相の下に認識する**

事物を単に偶発的なものとしてではなく、神とつながる必然的なものとして認識する

◎ \_\_\_\_\_（独、1646-1716、ニュートンとは別に微積分法考案）

◆ \_\_\_\_\_（单子）……物質の最小単位  
モナドは変化せず、その組み合わせが変わるだけ（現在の原子論の基）  
唯一絶対の完全者である神以外のモナドは、全て神によって作られる

→ **予定調和**……神があらかじめ「モナドの調和」を定めてある。

苦痛や災いも、世界の存在のために不可欠なものである。

世界全体は、モナドの運動により理性的に展開していく。

## 3. 自由で平等な社会の実現

### 1. 自然法・社会契約説

絶対王政を支える**王権神授説**

⇔ **自然法**……人間の共同生活を貫く平等で普遍的な法  
**社会契約説**……国家の形成を人民の契約関係で説明

◎ \_\_\_\_\_（蘭、1583-1645）＝“国際法の父”  
著書『\_\_\_\_\_』……国際法・海洋法の必要性を説く

◎ \_\_\_\_\_（英、1588-1679）……著書『\_\_\_\_\_』（1651）  
「万人は万人に対して狼である」＝人間の**自然状態**  
※しかし「死への恐怖」はある。そこで以下のように考える。

→この状態を避けるために個人はその自然権を統治主体（君主 or 合議体）に**譲渡**

→人民は国家権力に服従しなくてはならない（抵抗は許されない）

強力な主権の絶対性を主張 → 結果的にイギリスの王政復古後の絶対王政を擁護

◎ \_\_\_\_\_（英、1632-1704）……『\_\_\_\_\_』（市民政府二論）  
彼によれば「自然状態」でも自由・平等だった。しかし人間は理性的な存在であり、  
自然権も無制限ではダメ。「法の無いところに自由はない」と考える。

個人は契約によって自然権を統治者に委ねた（信託）

しかし、統治者が人権を侵害（＝契約違反）した場合にはその契約を破棄できる

→**抵抗権（革命権）**……名誉革命を理論的に擁護、アメリカ独立宣言などに影響

あくまでも主権は国民にある（主権在民）ということ

### 2. 啓蒙思想（enlightenment）

全ての迷信・伝統的偏見・不合理な制度を、理性によって批判する。

→フランスで開花し全ヨーロッパに広まり、フランス革命に結実

（ドイツ・ロシアなどでは啓蒙専制君主による“上からの近代化”）

※『\_\_\_\_\_（Encyclopedie）』……1751-72、本文17巻、図版11巻  
単なる辞書を超えた思想史的意義

国王の専制政治と、教会の愚民化政策を、理性の力で覆すために  
合理的・実証的な知識体系の普及をめざす



百科全書派（アンシクロペディスト、Encyclopedistes）

\_\_\_\_\_（仏、1713-84）、\_\_\_\_\_（仏、1717-83）  
ヴォルテール、モンテスキュー、ルソーらも協力

- ◎ \_\_\_\_\_ (仏、1689-1755)
- 1748 著書『 \_\_\_\_\_ 』……三権分立を説く
- ◎ \_\_\_\_\_ (仏、1694--1778)
- 1731 著書『 \_\_\_\_\_ (イギリス便り) 』  
イギリス議会政治礼賛＝フランスの旧制度批判  
キリスト教批判 (聖書は原始文明の産物、教義は争いと分裂の原因)
- 寛容論……宗教的寛容を説く
- ◎ \_\_\_\_\_ (仏、1712-78、ジュネーヴ生)
- ※「自然に帰れ」……この点で他の啓蒙思想家と大きく異なる
- 『 \_\_\_\_\_ 』(1755)  
自然状態＝**幸福な未開人** (平等な原始社会)  
↓  
社会状態……私有財産制・文明社会の中で  
不平等、支配と隷属の関係が発生・進行
- 『 \_\_\_\_\_ 』(1762)  
人民が十分な情報を持ち、**直接民主制**で党派を組まずに議論し、  
常に公共的利益をめざす「 \_\_\_\_\_ 」を形成する。  
その根底には道徳的な“哀れみ”の感情がある。
- ⇔「全体意志」……個々人の意志 (＝特殊意志) の総和
- 誰もがその身体と全権を一般意志の指導下に置く。  
抵抗権は認めない。  
(共同体への完全な譲渡、という点ではホッブズと同じ)  
そして共同体の全構成員を不可分の一部として受け入れる。  
＝この精神的共同体が「人民主権の国家」
- ※社会契約によって、**自然的自由**を失うかわりに**市民的自由**を得る。
- 『 \_\_\_\_\_ 』(1762)……教育論的エッセー →「第2の誕生」  
従来の教育は社会的な不平等への適応のためのものである。  
→ 社会の悪影響を退け、子どもが元来持つ自然の善性を守り育てる。
- ※ 学校教育を創出したのも、「人間は教育を受けることによって人間になる」  
と考える啓蒙思想家たちだったが、ルソーは彼らとは全く考え方が異なる。

### 3. ドイツ観念論哲学

- ◎ \_\_\_\_\_ (独、1724-1804、現ロシア領ケーニヒスベルクの人)
- 理性を重視する啓蒙思想の流行の中で、「理性」そのものを分析した大哲学者。
- 『 \_\_\_\_\_ (Kritik der reinen Vernunft) 』(1781)  
……科学的認識能力の分析
- ヒュームが、帰納法により導かれる法則を否定したことに対抗  
→人間は法則を考えるようにできている動物だ。  
(因果律は理性が持つ認識の枠組みの1つだから)
- コペルニクスの転回**  
認識が対象に依存するのではなく、対象が認識に依存する
- ①. 対象がなくては認識は成立しない。  
②. 対象は**感性** (Sinnlichkeit、感覚器官) の持つ  
「時間」「空間」という枠組みの中で直観される。(＝経験)  
③. 直観されたものを整理・統合するのは、  
**悟性** (分析・判断能力) が先天的に (**ア・プリオリ**、a priori) に持つ  
「量・質・因果律などの思考の枠組み＝**カテゴリー** (範疇)」である。  
※悟性＝Verstand (英、understanding＝理解力)
- ④. 認識できるのは、「**現象**」＝**感性がとらえたものを悟性が再構成したもの**  
である。**対象そのもの**＝「**物自体**、Ding an sich」は認識できない。
- 『 \_\_\_\_\_ (Kritik der praktischen Vernunft) 』(1788)  
および『道徳形而上学原論』(1785)……道徳的理性の分析 (後述)
- 『判断力批判 (Kritik der Urteilskraft) 』(1790)  
……自然と道徳とを、「美」と「合目的性」で統合する「統制的判断力」
- 『 \_\_\_\_\_ 』(1795)……国際的平和機関の提唱

以下、「実践理性批判」の道徳論 ⇔ ベンサムの功利主義と対立

- ・ \_\_\_\_\_ ……行為の善悪を判断し、善を行うように命ずる理性 (≒良心の声)  
これに従って生きるのが真の自由である。  
⇔**感覚や欲求**に従って生きるのは、**自然法則**に従う物質と同じであり、  
そのような生き方には「人間の尊厳」はなく、自由でもない。

- ・誰もが従うべき普遍的な道徳法則（**道徳律**、人間の理性に生まれつき備わる）がある。

「**汝の意志の格率**（個人が自分のために採用する行為規則）が、  
常に同時に普遍的立法の原理となるように行為せよ。」

＝「これが誰もが従う法則になればいいなあ、と思えるような法則に従って行為せよ」

- ・実践理性の命令は\_\_\_\_\_（無条件の命令）



世間的な忠告の多くは\_\_\_\_\_（条件付き命令）

「推薦入試で有利になりたいければ、ボランティアをしろ」

※ 結果が良くても（適法）、動機が不純ならば「道徳的」とは言えない

この点で、功利主義やプラグマティズムと正反対の思想

- ・ \_\_\_\_\_ ……道徳法則に自律的に従って正しく生きる主体  
人格として存在することに人間の尊厳がある

「自分及び他人の人格の内にある人間性は、  
常に（尊重すべき）目的として取り扱い  
決して手段としてのみ取り扱わないように行為せよ」

- ・ 目的の王国 ……相互の人格を尊重する理性的存在者の共同体

※カントの墓碑銘 ……「常に新たな感嘆と崇敬の念をもって心を満たす2つのものがある。  
わが上なる星空と、わが内なる道徳律である。」（『実践理性批判』）

#### ※フランス革命・ナポレオン戦争を挟んでのヨーロッパ思想の大きな変化

フランス革命につづくナポレオンによるヨーロッパ支配は、「自由・平等を唱える国が他国を支配する」という矛盾を持っていた。そこで思想界においても、啓蒙主義の説く「普遍的真理に対する疑念が生まれ、各民族固有の歴史的条件によって真理も変化する、という考えが流行  
→ヘーゲル、歴史主義

#### ◎フィヒテ（独、1762-1814、※ナポレオン占領下で、「ドイツ国民に告ぐ」の連続講演）

個人的な自我の根底に、超個人的な「絶対我」を置く。＝道徳的・理想的な絶対我

個人的な自我、および自然（「非我」）はともに、絶対我が自己実現のために作り出したもの。

#### ◎シェリング（独、1775-1854、15歳で大学入学、23歳で大学教授）

「同一哲学」 ……自我と非我の区別を否定。この2つは根本的に同一 ……「絶対者」と呼ぶ

※晩年はこうした考え方を否定し、キルケゴール的な考えに向かう

#### ◎ \_\_\_\_\_（独、1770-1831）

カントの考える「自由」 ……個人の内面にある普遍的な道徳法則に従うこと



ヘーゲル ……カントの考えを「個人の内側にとどまる主観的自由」と批判

・自由は、社会の法・制度の中で社会的・客観的・具体的に実現するもの

「**理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である。**」

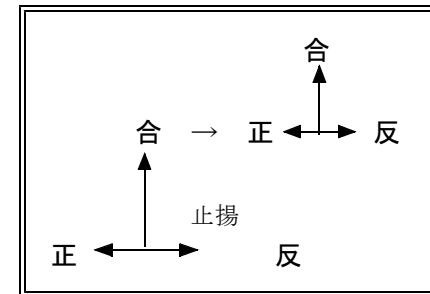
・「すべては歴史の中で変化する」＝生き方の基準も社会的環境の中で変化していく。

「**世界史は自由の意識の進歩である。**」

◆ \_\_\_\_\_ ……個人を超えた理性＝歴史を動かす原動力



◆ \_\_\_\_\_ ……絶対精神の発展の法則  
運動や発展は、**矛盾や対立**を原動力として起こる



\_\_\_\_\_（テーゼ） ……現状

\_\_\_\_\_（アンチテーゼ）

……現状に対する矛盾・対立

\_\_\_\_\_（ジンテーゼ）

……矛盾・対立を解消した新段階

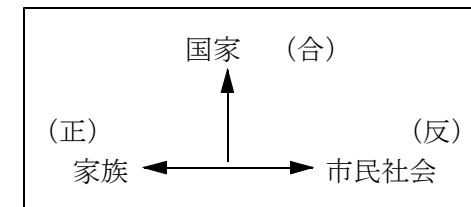
\_\_\_\_\_（アウフヘーベン）

……より高い次元に移行し、  
矛盾・対立を解消すること

◆ \_\_\_\_\_ ……「個人の良心（道徳）」と「共同体のルール（法）」の中で  
正しく生きる人間のあり方

その3段階 ……弁証法で説明

\_\_\_\_\_（愛情による結合）と \_\_\_\_\_（欲望の体系）とを  
統合した最高の共同体が \_\_\_\_\_ である、とする。



※. このように国家を重視する考え方は、全体主義につながるものとして、批判も多い。

※ デカルトに始まる「近代西洋哲学の大きな体系」は、ヘーゲルで終了。  
以後は、「現実について」「行動の哲学」になっていく。